

18世紀満州語の特徴

白 応 鎮

1. 『老乞大』と『清語老乞大』
2. 満州語文語と『清語老乞大』
3. 『清語老乞大新釈』の特徴
 - 3.1 『清語老乞大新釈』の編纂経緯
 - 3.2 実用会話教材
 - 3.3 凡人の言語と人生観、生活習慣、商売人達の交易買賣に使う表現
 - 3.4 18世紀中葉の満州語の現実発音
 - 3.5 18世紀口語満州語の bi と aku

キーワード：満州語、口語、18世紀、清語老乞大、満文老檔

1. 『老乞大』と『清語老乞大』

この論文の主な目的は18世紀満州語の特徴を記述することである。ここでいう18世紀満州語とは、18世紀に出版された『清語老乞大新釈』に記録された満州語を指す。'老乞大'という漢字を、現代北京語では「lao qi da」、明代北京語では「lao ki ta」で、韓国語では「no geol dae」と読んでいる。

	老	乞	大
(1) 明代北京語	lao	ki	ta
現代北京語	lao	qi	da
現代韓国語	no	geol	dae

明代北京語の「lao ki ta」の「ki ta」は契丹の訳音で北方民族の間で中国を指す「ki ta」に lao (老)をつけたタイトルである。この ki

ta (乞大)は蒙古語では ki tad で、中国を指す。lao (老)は、長年その土地に親しんで明るいことをいうので、老乞大は尊敬に値する中国人を意味するものと思われる。

	乞	大
(2) 契丹語訳音	ki	ta
蒙語老乞大	ki	tad

尊敬に値する中国人を意味する『老乞大』というタイトルの出版物が韓国で15世紀に刊行された。『中国語学新辞典』（中国語学研究会編、光生館1974）によれば、『老乞大』は最初に1423～1434年に刊行され、李朝初期のもっとも権威ある中国語教科書として使われたが、時代の変遷とともに改訂の必要が生じ、1480～1483年の間に二人の中国人によって改訂された。その後、天才的な語学者である朝鮮の崔世珍が諺解した『翻訳老乞大』が1512年に出版された。この『翻訳老乞大』は17世紀に改修され、1670年に『老乞大諺解』として改訂される。その後、『老乞大』を蒙古語に翻訳した『蒙古老乞大』が1766年に、満州語に翻訳した『清語老乞大新釈』が1765年に李朝司訳院によって出版された。

『老乞大』、『翻訳老乞大』、『老乞大諺解』は会話教材で、この教材の中国語は中国語の書面語である漢文とは異なる。実際、明代と清代には二種類の中国語が韓国で使われていたのである。この二種類とは「文言」と「白話」で、文言は普通漢文という書面語で、この漢文は三国

時代、統一新羅、高麗、朝鮮時代の19世紀の末まで朝鮮半島の唯一の官用書面語であった。朝鮮半島の人々は日常生活の会話には朝鮮語を使っても、書き物には、書面語漢文を使った。ところで、この漢文の読みは当時の韓国語の漢字発音で読んだ。この韓国語の漢字の韓国式発音を英語では「Sino-Korean」と言う。この Sino-Korean は10世紀以前の中古中国語の多数の音韻を保存している。

漢文と対照的に、白話は、宋代、明代、清代の北京語で、『老乞大』、『翻訳老乞大』、『老乞大諺解』の会話教材テキストに載っている中国語は、概ね明代の口語北京語だと思われる。『翻訳老乞大』と『老乞大諺解』にはテキストの中国語の側にテキストの発音が韓国の文字で転写され、テキストの下には中国語が韓国語に翻訳されている。例えば、韓国の文字で転写された「王京」の発音が『翻訳老乞大』に「wang king」と記録されている。この wang king の発音は、現代北京語では「wang jing」、現代韓国語では「wang gyeong」と現されている。北京語で wang king の king が口蓋音化されて jing になったのは18世紀以後だと思われる。従って、wang king の king は18世紀以前の北京語の発音だと思われる。

次に『老乞大』を蒙古語と満州語に翻訳した蒙古語と満州語の会話教材である『蒙古老乞大』と『清語老乞大』について簡単に説明する。『蒙古老乞大』は中国語教材だった『老乞大』の中国語を蒙古語に翻訳したものが主なテキストになっている。「Uighur」文字を使って記録した蒙古語テキストには、18世紀蒙古語の発音が韓国文字で転写されている。また蒙古語テキストの下には蒙古語が韓国語に翻訳されている。

『蒙古老乞大』と同じように、『清語老乞大』でも、18世紀満州語が Uighur 文字を使って記録されている。この Uighur 文字で書かれた満州語の側には当時の満州語の発音が韓国文字で

転写されている。また満州語テキストの下には満州語が韓国語に翻訳されている。

(3) Uighur 文字 bi coohiyan wangging ci jihe
韓国文字 bi caohian wangging ci jihe
津曲敏朗 私は 朝鮮 王京から 来た
(1977-78)

(3)は『清語老乞大』に Uighur 文字で記録したテキストをローマ字で転写した満州語と Uighur テキストの韓国文字による音訳をローマ字で転写した満州語である。ここで注目すべきは Uighur 文字で記録した coohiyan (朝鮮)が韓国文字で音訳した18世紀満州語では caohian (朝鮮)になっていることである。Uighur 文字で書いた coohiyan と韓国文字で書いた caohian との発音の変化は17世紀の満州語書面語と18世紀口語満州語との間には相違点があったことを現していると思われる。Uighur 文字で書かれた coohiyan は17世紀の満州語書面語を、韓国文字で書かれた caohian は18世紀満州語の実際の発音を現していると考えられる。

『清語老乞大』に興味を持って『清語老乞大』の Uighur 文字表記をローマ字に転写した学者が二人いる。一人は台湾の学者である莊吉発、一人は日本の津曲敏朗である。(4)は、莊吉発(1976)による転写である。

(4) Uighur 文字表記

meni ama eniye taci sehe kai
莊吉発の転写

meni ama eniye taci sehe kai
韓国文字表記

meni ama enie taci sehe kai
津曲敏朗(1977-78)

我々の 父 母が 学べ と言ったのだ

ここで指摘したいのは、これが Uighur 文字で書かれた満州語と全く同じであることだ。台

湾の莊吉発は韓国文字による転写記録を全く無視している。もう一つ指摘したいのは満州語の中国語翻訳だ。彼の『清語老乞大』の満州語の翻訳は現代北京語であり、『老乞大』の明代清代の北京語ではない。

『清語老乞大』の満州語をローマ字に音訳したい一人は日本の津曲敏朗である。彼は Uighur 文字で記録した本来のテキストと Uighur 文字を韓国文字で転写した満州語の両方を参照しながらローマ字化しようとした。

(5) Uighur 文字表記

meni ama eniye taci sehe kai
津曲敏朗の転写

meni ama eniye taci sihe kai
韓国文字表記

meni ama enie taci səhe kai
津曲敏朗(1977-78)

我々の 父 母が 学べ と言ったのだ

彼がローマ字化したのを詳しく見ると、'母'という単語は満州語書面語の eniye をそのまま eniye と転写している。これは満州語の書面語である。これとは対照的に、'言った'の意味をもつ動詞は韓国文字転写に基づいて sihe と転写している。この sihe の 'i' は、現代韓国語の中舌非円盾狭母音である。彼が韓国文字転写に基づいて転写した sihe は、18世紀満州語の現実発音を反映していると思われる。ここで指摘したいのは、津曲敏朗の転写が満州語書面語、正確に言えば、17世紀以前の満州語と18世紀の満州語を混合している点である。

2. 満州語書面語と『清語老乞大』

明代末期に興起した満州族と共に、満州族の言語である満州語が歴史の全面に現れ出た。周

知のように、満州語書面語は、中国清朝1644年から1911年までの約260年間、清朝の公用語で、女真族の女真語と親縁関係が非常に近い言語である。因みに中国の学者愛新覚羅・烏拉照春(1992)は、満州語の四つの方言ー京旗満州語と黒龍江満州語、嫩江満州語、伊り満州語ーの中で京旗満州語が満州語書面語を創製する時、満州語書面語の基本根拠にした基礎方言で、満州語書面語は明代女真語の直接的後裔だったと主張している。

この女真語は金国(1115-1234)を創建した女真族の言語である。女真族は女真文字を用いて女真語を記録した。明代に至って女真語は「永寧寺碑」のような碑文にも残るが、ほかに『華夷訳語』中の「女真館訳語」に見られる。日本の学者池上二郎(2000)によると、金代と明代の間にも音韻変化が見られる。例えば、Tungusic-Manchu 祖語の語頭の p- は、金代女真語にそのまま保存されている。しかしこの金代女真語の p- は明代女真語では f- に変化している。

清代の満州語書面語は、はじめは無圈点満州字という文字で書かれたが、後には有圈点満州字という文字を用いて書かれた。『満州実録』によれば、清の太祖は自分が1599年に蒙古字を用いて満州語を記録する満州字を作ったと記録している。この満州字が無圈点満州字と呼ばれる。一方『満文老檔』には、太宗は1632年に達海に無圈点満州字の改良を命じ、丸や点をつけて音を詳しく区別する有圈点満州字が作られたと記されている。太祖の満暦35年(1607)から太宗の崇徳元年(1636)までの清朝の古記録である『旧満州档』の大部分は無圈点満州字で書かれた資料で、貴重なものである。この『旧満州档』は日本の学者神田信夫と松村潤、岡田英弘が訳註を付して昭和47年東洋文庫から出版された。

有圈点満州字採用後の満州語文献は豊富にある。満州語の辞書には、『大清全書』のような満漢辞典をはじめ種々ある。満州語の文法、読

本もいくつも編纂され、なかでも『清漢字清文啓蒙』は広く読まれている。清朝史に関する文献は、『旧満州档』を乾隆40年代に写し書き換えた『満文老档』の有圈点満州字本と、清朝の建国説話と清の太祖の事績を記録した『満州実録』、その他多量の清の官庁文書がある。『旧満州档』と『満文老档』は日本の学者が訳註して、東洋文庫によって出版された。

韓国においては、李朝時代に司訳院がおかれ、そこで満州語の学習が行われた。乾隆年間(1736-95)には、満州語辞典として『同文類解』と『漢清文鑑』が出版された。また満州語学習の教材としては、『清語老乞大』と『八歳児』、『小児論』、『三訳総解』が出版された。これらは、満州語を韓国語に翻訳しただけではなく、満州字を韓国文字に音訳してあり、その韓国文字音訳から当時の満州語の発音を伺うことが出来る重要な資料である。その中でも特に『清語老乞大』は凡人達の日常生活の会話だけが載っているのが特異な点で、清代260年間に出版された満州語の文献の中で口語満州語としては唯一の資料であり、貴重なものである。

3. 『清語老乞大』の特徴

3.1 『清語老乞大新釈』の編纂経緯

『清語老乞大新釈』(1765)が編纂された経緯を調べることによって、この満州語教材のテキストがいかなる性格をもつものかがあきらかになる。

『清語老乞大新釈』の序言によれば、丙子胡乱後に清から帰還してきた戦争捕虜(東還者)に依って『老乞大』の初版が出版されたとされている。丙子胡乱とは、1636年に清が朝鮮を侵略した戦争である。この戦争後、清は大勢の朝鮮人戦争捕虜を朝鮮半島から中国に連れ出した。この捕虜たちは長い間清で捕虜生活をしながら満州語を習得して母国に帰還した。このように

捕虜として清で苦しい生活をしながら満州語を習得した戦争捕虜たちは、母国に帰って『老乞大』初版の出版に貢献した。

捕虜生活のなかで外国語を習得し、朝鮮に帰ってきて、その外国語の教材が編纂されたのは『清語老乞大』だけではない。日本が朝鮮を侵略した任辰倭乱(文禄の役1597)の時、捕虜として日本に強制連行され、日本で日本語を獲得、母国に帰還して、日本語の教材を編纂した学者もいる。それは康遇聖といい、日本で約10年間捕虜生活をしながら日本語を習得、母国に帰還して日本語教材を独力で著述した。彼の有名な著作は『捷解新語』(1676)である。

岸田文隆(1997)によれば、『清語老乞大』の初版は捕虜が最初から作製したものであったために、誤りや未熟な点が多く見られたようだ。威鏡道成興の訳官金振夏が清語老乞大の改修作業に当たり、1760年(庚辰)の開市の折に朝鮮と中国の国境地帯に位置している会寧へおもむき、寧古塔からやってきた筆帖式に音義(発音と意味)と字画(正しいつづり字法)について質問し、さらに次の開市の折にも再び会寧に行き筆帖式に質問した。「筆帖式」(bithesi)は清人官吏で満州語を熟知していた者だと思われる。一方寧古塔(ningguta)は、今の吉林である。このように金振夏訳官ははるか国境地帯の会寧まで行って苦勞しながら清語老乞大の改修作業を続けた。彼が改訂した『清語老乞大新釈』は1765年に出版された。金振夏訳官は『清語老乞大新釈』のほかにも『三訳総解』と『八歳児』、『小児論』等を改修して重刊した。

3.2 実用会話教材

『清語老乞大新釈』は他の清代文献とは異種の会話教材であり、それが『清語老乞大新釈』の特徴である。そのテキストは、話す人と聞き手の二人の対話ばかりで成り立っている。

- (6) 朝鮮人 bi coohiyan i niyalma bi sini
emgi ucu arame geneci antaka
私は朝鮮のものだ。私はおまえと
一緒に仲間になって行けばどうだ
- 漢人 uttu oci sain kai use sasari
yoki dere
それなら良かった。我々共に行こ
うではないか
- 朝鮮人 age sini hala ai
兄おまえの姓は何か
- 漢人 mini hala wang
私の姓は王だ
- 朝鮮人 sini boo aibide tehebi
おまえの家はどこにあるか
- 漢人 bi liyoodung hoton dorgi de tehebi
私は遼東城内に住んで いる
- 朝鮮人 si genum hecen de ai baita bi
fi genembi
おまえは首都に何の用があって行くか
- 漢人 bi ere morin be bošome
gamafi uncame genembi
私はこの馬を追い立てて、連れて
売りに行く

(6)には、馬を連れて北京に売りに行く朝鮮王京の朝鮮人と遼東城の漢人二人の対話が記録されている。このように『清語老乞大新釈』には第一巻から第八巻まで、対話だけでテキストが成り立っている。朝鮮司訳院の出版物一『同文類解』、『漢清文鑑』、『清語老乞大』、『八歳児』、『小兒論』、『三訳総解』等一の中、『清語老乞大新釈』を除外した他の文献には対話が載っていない。

3.3 凡人の言語と人生観、生活習慣、商売 人達の交易に使われる表現

凡人の言語

『清語老乞大新釈』の対話の参加者達は商売

人、農民、居酒屋、旅館の主人、占師等で、このような凡人たちの言葉がテキストに載っている。この人達の言葉の他にも、彼ら凡人たちの思考方式や価値観、人生観がテキストに現れる。

- (7) muse margi alin de genefi hamtaci antaka
われわれうしろの山にいて便をしたらどうか
bi morin be jafafi bisire si gene
私が馬を御している間におまえが行け

(7)にみえるのは凡人たちが日常生活に使う言葉の表現だと思われる。支配階級の両班がこのような表現をするとは稀なことである。

凡人の人生観

この人達の言葉の他にも、彼ら凡人たちの思考方式や価値観、人生観がテキストに表現されている。

- (8) 我々毎年毎月毎日楽しんで、春夏秋冬四季に一日も欠かさず遊ぼう。今日死ぬ明日死ぬを知らないのに、明るい空、良い陽ざしの日、澄んだ月、清らかな風の夜をむなしくぼんやり過ごして楽しまないなら、これ本当に愚かな人だ。見よ、世の人生きる時に、ただ 満ち足りないために愁えて一切の物を惜しみ、夜昼あくせくしながら一朝たちまちにして死んだら、これほど骨を折って立てた一戸家産、良い馬牛、美しい衣服着物、容姿のよい女、美しい妾をほんの少しも連れて行けない。むなしく別の人に入手させる。これを見れば、時機を追って楽しむのをはなはだ非と言えない。

(津曲敏郎1977-78)

占師の占い

占師の占いが凡人たちの日常生活に重要な一部だったことも『清語老乞大新釈』のテキスト

は示している。

(9) 商売人 強者我々良い日を選んで後でいこう。ここに五虎先生がいる。日選ぶときわめてむずかしい。彼に選ばせに行こう。おまえは私の八字を見よ。

占師 おまえの生まれた年月日刻を告げよ。

商売人 私は丑年の者、今年四十歳になった。七月七日の寅の刻に生まれた。

占師 おまえの生まれた時、きわめて良い。常に衣服豊かだ、窮乏ことなくに至らないといえども、ただ官爵の星ない。取り引きを行うのに良い。

商売人 私は折後で行こうと言う。どの日が良いか。

占師 おまえは、ちょっと待て、私が選んでみよう。今月二十五日の寅の刻に、東に向かって出発して行けば大きな利益得る。選んだ手間賃五分を置け。

(津曲敏郎1978)

商売人達の交易に使う表現

『清語老乞大新釈』では朝鮮王京から清の北京に馬と人参、麻布、葛布等を輸出して、帰路には北京からいろいろな雑貨を朝鮮に輸入する商売人たちの対話が、主なテキストの内容である。だから、商売人たちが売買交易に使う多種多様な表現が載っている。その中でも、なにより注目されるのは(10)に見える馬の売買契約書である。

(10) この文書を書いたのだ。私が読む。おまえは聞け。

遼東城内に住んでいた王姓の人、銭ない

ので、彼の買って来た左側の脚の後部に、印押した証のある五歳の赤毛の去勢馬一頭を、首都の羊の取引街の北に住んでいた王姓の人を証人にして、山東済南府李姓の人に売った。その時の値に従って細銀十二両を、文書書いた折りにすべてわたしてやった。馬の良し悪しを買う人調べてみて、値定めた。後何人として後悔して後で返すことはできない。もしも後悔して後で返すことあれば、良い銀五両を取り出して返さない人に与えて使わせる。後の証ないといけないからとて、この文書かいた。

文書書いた人の姓 王。仲買人の姓 張。各々の下に皆証字書いた。

(津曲敏郎1977-78)

3.4 18世紀中葉の満州語の現実発音

満州語書面語は、無圈点満州字または有圈点満州字で書かれた文献で、清朝260年間清の公用語であった。ここで指摘しなければならないのは、満州語書面語の音韻は無圈点満州字(1599)または有圈点満州字(1632)が採択された当時の発音を反映している点である。だから満州語書面語の音韻は、17世紀初めの発音を反映している。これとは対照的に『清語老乞大新釈』の韓国文字表記は、18世紀満州語の現実発音を反映している。17世紀初めの満州語書面語は18世紀『清語老乞大新釈』の Uighur 文字表記に何の変化もなく、そのまま保存されている。ところで『清語老乞大新釈』の Uighur 文字表記を韓国文字表記と詳しく比較してみれば、異なる点が少々見られる。ここで Uighur 文字表記と韓国文字表記の差異点は17世紀初めと18世紀の間に発生した音韻変化だったとしか考えられない。

『清語老乞大新釈』の Uighur 文字表記と韓国文字表記の差異点の一部は ① oo > ao、②

iya, iye > ia, ie, ③ ūwa, uwe > ua, ue、

④ ū > u、⑤ e > ə 等である。

① oo > ao

満州語書面語の oo が『清語老乞大新釈』の ao に対応する例が見られる。

(11) 満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
coohiyan	caohian	朝鮮
joo	jao	趙(姓)
liyoo	liao	料(草料)
liyoo dung	liao dung	遼東

満州語書面語の liyoo dung(遼東)と liyoo (料)は、『満文老檔』と『満州実録』、『同文語解』にも見られる。(11)の oo は17世紀の満州語では、記録された通り、二重の母音だと思われる。この17世紀の oo は18世紀では ao に変化していて、これを『清語老乞大新釈』の編纂者金振夏が確認して記録したと考えられる。(11)の例は中国語の借用語で全部北京語の発音である。これは中国漢字の発音が北京語で明代の oo が 清代には ao に変わったことを示していると思う。

中国語の借用語漢字の発音に見える変化とは対照的に、表記では全く同一である oo が本来の満州語では何の変化もなく、17世紀の oo がそのまま記録されている。

(12) 満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
ayoo	ayoo	一ではあるまいか
boo	boo	家
cooha	cooha	兵
hooš an	hooš an	紙
joo	joo	やめなさい
kooli	kooli	わけ
moo	moo	木

yooni yooni 全く

(12)の例は全部純粹満州語本来の単語である。これは満州語においては、oo は17世紀18世紀との間に何の変化もなく、そのまま保存されているの示している。

② iya, iye, iyo > ia, ie, io

満州語書面語の iya と iye、iyo が『清語老乞大新釈』の ia と ie、io に対応する例が見られる。これは母音の間で 17世紀の y が削除されたことを示している。

(13) 満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
aliya-	alia-	待つ
aniya	ania	年
bargiya-	bargia-	受け取る
biya	bia	月
coohiyan	coohian	朝鮮
fulgiyan	fulgian	赤
elgiyen	elgien	豊富な
eniye	enie	母
isheliyen	ishelien	狭い
niyengniyeri	niengnieri	春
nekeliyen	nekelien	細い
fiyokoyuru	fiokoyuru	よろよろ歩く
hiyoošungga	hioošungga	孝行な

(13)は、満州語書面語の iya と iye、iyo の発音が18世紀に ia と ie、io に変化していることを示している。口蓋滑音 y は先行する口蓋母音 i と次に続く他の母音との間で削除されたのであろう。

③ ūwa, uwe > ua, ue

満州語書面語の ūwa と uwe が、『清語老乞大新釈』の ua と ue に対応する例が見られる。

(14)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
	juwan	juan	十
	dashūwan	dashuan	弓袋
	gūwa	gua	別の
	hūwa	hua	庭
	hūwaita-	huaita-	しばらせる
	hūwaliyasun	huliasun	和合する
	beiguwen	beiguen	寒さ
	guweleku	gueleku	妾
	huwesi	huesi	短刀
	juwen	juen	借款
	serguwen	serguen	涼しい
	suwe	sue	あなたたち

(14)は17世紀満州語書面語の唇音滑音 w が18世の満州語では、先行する唇音母音 u と後に続く a と e の間で削除されたことを示している。この唇音滑音 w の削除過程は18世紀には未だ完了していない。

(15)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
	muwa	muwa	粗大
	muwakan	muwakan	いささか粗大な
	tuwa	tuwa	火
	tuwa-	tuwa-	注視する
	tuwana-	tuwana-	見に行く
	tuwaša-	tuwaša-	遊樂する
	juweas	juwe	二
	tuweri	tuweri	冬

(15)の例には、17世紀満州語書面語の唇音滑音 w が18世の満州語で先行する唇音母音 u と後に続く a と e の間で削除されていない。これは唇音滑音 w の削除が18世紀にまだ進行していることを示している。

④ ū > u

17世紀満州語書面語の後舌高母音長母音 ū は、18世紀清語老乞大新釈の韓国語文字は短母音 u に対応するのを示している。

(16)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
	ahūn	ahun	兄
	akū	aku	無
	farhūn	farhun	暗い
	gūnin	gunin	考え
	hafirafūn	hafirafun	貧乏な
	malanggū	malanggu	ごま
	tarhūn	tarhun	肥えている

Möllendorff (1892) は ū の音価を長母音、u の音価を短母音と見て、ū と u との相違点は母音の長短にあったとを記述している。この二つの別の母音 ū と u が、『清語老乞大新釈』の韓国語文字表記には一つの同一の母音 u と記録されている。これは17世紀満州語の長母音 ū が短母音 u と合併したことを示していると思われる。

⑤ e > ə

Möllendorff (1892) によれば、満州語書面語の e の音価は前舌母音である。この17世紀満州語書面語の e が中唇母音 ə に対応する例が18世紀『清語老乞大新釈』の韓国語文字表記に頻繁に見られる。

(17)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新釈 (韓国語文字)	
	agese	agesə	兄たち
	andase	andase	友人立ち
	gucuse	gucesə	友だち
	morin se	morin sə	馬 (morinの複数形)
	muse	musə	われわれ

niyalma se	nialma sə	人たち
ese	esə	これら
tese	tesə	それら
ulha se	ulha sə	家畜 (ulhaの複数形)

(17)には複数形 se が sə になって、前唇母音 e が 中唇母音 ə に変化しているのが見られる。

(18)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新訳 (韓国語文字)	
	se	sə	と言え
	seci	səci	と言わば、と言っても
	secibe	səcibe	と言っても
	sere	səre	と言う
	sehe	səhe	と言った
	sehebi	səhebi	と言うことだ
	sehengge	səhengge	と言ったのは
	sembi	səmbi	と言う
	sembihe	səmbihe	と言っていた
	sembio	səmbio	と言うのか
	seme	səme	と
	serakū	səraku	と言わない
	serengge	sərengge	ということ言う

(18)には、動詞 sembi(-と言う)の多様な活用形で、前唇母音 e が中唇母音 ə に変化しているのが見受けられる。

(19)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新訳 (韓国語文字)	
	aise	aisə	のではないか
	dere	dəre	…であろう
	tetendere	tetendəre	…する限りは
	deri	dəri	…を通して

(19)には、叙述に対する話者の心的態度(推測、可能性等)を示す助辞と名詞の格助辞に現れる前唇母音 e が中唇母音 ə に変化しているのが見受けられる。

(20)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新訳 (韓国語文字)	
	dengjan	dəngjan	燈
	gise	gisə	商売女
	hese	hesə	勅書
	hiyase	hiase	箱
	feise	feisə	煉瓦
	fuseri	fusəri	サンショウ
	hengke	həngke	うり類
	mase	masə	あばた
	puseli	pusəli	商店
	sefu	səfu	師
	useri	usəri	石榴

(20)は、中国北京語から輸入した借用語のなかに現れる前唇母音 e が中唇母音 ə に変化していることを示している。これは満州語が中国北京語の影響を受けていることを示していると思われる。

(21)	満州語書面語 (Uighur)	清語老乞大新訳 (韓国語文字)	
	bederebu-	bedərebu-	返却する
	sebderi	sebđeri	陰

(21)では、純粋満州語本来の単語にも、前唇母音 e が中唇母音 ə に変化している場合が見える。

今まで観察した資料によると、17世紀満州語書面語の前唇母音 e が18世紀では動揺していたことが明らかである。これは中国北京語から輸入した借用語から始まって、日常生活に頻繁に使われた名詞の複数形、sembi(話す)という単語、叙述に対する話者の心的態度(推測、可能性等)を示す助辞等で現れる前唇母音 e が中唇母音 ə に変化して、純粋満州語本来の単語でも前唇母音 e が中唇母音 ə に向かった中唇化が始まったと思われる。このように18世紀に始まっ

た前唇母音 e の中唇化が20世紀に入って終わったと思う。河野六郎(1944)によれば、20世紀中葉に彼が観察した満州黒龍江地方の満州語では、満州語書面語の前唇母音 e が中唇化している。この e の中唇化は新疆の錫白族の現代満州語(錫白語)にも見られる。一言で言えば、18世紀に始まった前唇母音 e の中唇化は20世紀に入って終了した。この前唇母音 e の中唇化は17世紀と20世紀の間に満州語音韻体系に起こった目立つ重要な音韻変化の一つである。

3.5 18世紀口語満州語の bi と akū

『清語老乞大新釈』のテキストに現れる bi (存在する)と akū (無)は、18世紀口語満州語の特徴の一つであると思われる。満州語学界では bi と akū を無活用動詞と呼んで、活用動詞である bimbi と無活用動詞 bi を区別する一方 akū は動詞として分析している。しかし、17世紀『満文老檔』に関する調査によれば、17世紀の満州語では bimbi と bimbi の短縮形である bi が共存していた。だが『清語老乞大新釈』では、bimbi が一度も使われていない。bimbi の短縮形である bi だけが使われている。また『満文老檔』では akū が動詞として使われたが、『清語老乞大新釈』では akū を動詞と呼ぶ何らの根拠を見付けることができない。この akū は形容詞または抽象名詞として文のなかで様々な機能をはたしている。

(22)は、『満文老檔』で'bimbi'が現れた6つの例である。そのほかの文では全部(23)の例に見えるように bi が使われている。(例の4-134で4-は『満文老檔』の第四巻、-134は頁をしめす。)

- (22) geli geneci jing jugūn de bimbi
再び行けば常に道にゐる 4-134
emhun beging ni hecen adarame bimbi

- 独り北京の城どうしてある 4-392
jorire be donjime bimbi
指示するを聞きゐる 4-438
ulha wame sarin sarilahai bimbi
家畜殺し酒宴しつつゐる 1-253
geren gemu ilihai bimbi
衆人皆立ったまゐる 6-1181
yamun de faidahai bimbi
衙門に並んだまゐる 6-1051

- (23) orin isime bi
二十ばかりゐる 5-529
juwe tumen funceme bi
二萬余りある 5-528
morin yaluci ojongge ninju funceme bi
馬乗る事が出来るもの六十余りある 5-553

膨大な資料である『満文老檔』で bimbi がただ六つの例しか見付からないのは17世紀の満州語で bimbi が殆ど使われていなかったことを暗示している。その結果、18世紀の満州語では bimbi の短縮形 bi だけが使われるようになったと思われる。

満州語学界では akū を無活用動詞と呼んで動詞として取り扱っている。これは17世紀の満州語では正しい理解だと思われる。(24)の例に見るように、『満文老檔』では -bi と -ha、-ci、-cibe のような動詞の活用語尾が akū に添付されている。

- (24) sargan jui be burakūbi
女子を与えないでゐる 1-38
sibe de nikan buhekūbi
Sibe に Nikan 与えてゐない 2-843
ere hoton de jihekūbi
この城に来てゐない 1-179
geli bucehekūbio

また死んでゐないのか	4-96
feye bahafi akūha	
傷得てなくなった	5-555
beiguwan be dain de akūha	
備官を戦になくなった	5-637
afafi beye akūha	
戦って身なくなった	5-63
kooli akūci	
例なければ	1-20
tuttu akūci	
さやうでなければ	1-177
elhe akūci	
緩やかでないならば	1-272
cooha akūci	
兵なければ	1-442
mende hoton akūci	
我らに城なければ	3-983
uttu akūci	
かやうでなければ	4-169
muterakūci	
出来なければ	1-95
bahacibe bararakūcibe	
得ても得なくても	6-1038

『満文老档』では、akū が動詞の語幹として機能したけれども、『清語老乞大新釈』では、akū に動詞の活用語尾が添付された例は一度もない。これとは対照的に、akū に名詞の格語尾が添付された例がしばしば見える。これはakū が18世紀の満州語で名詞として機能していたことを示すものである。これは『満文老档』に反映されている17世紀の満州語書面語と『清語老乞大新釈』に反映されている18世紀の口語満州語のあいだには相当な相違点があることを示している。このように『清語老乞大新釈』の

満州語には満州語書面語とは音韻論と形態論において様々な異なる点が見える。これが『清語老乞大新釈』に反映されている18世紀口語満州語の特徴である。

参考文献

- 池上二郎「ツングース諸語」『世界言語学大辞典』、東京：三省堂、2000年
『満州語研究』、東京：汲古書院、1999年
神田信夫・松村潤・岡田英弘(訳註)『旧満州档』、東京：東洋文庫、1972年
岸田文隆『「三訳総解」の満文にあらわれた特殊語形の来源』、東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1997年
河野六郎「満州国黒河地方に於ける満州語の特色一朝鮮語及満州語の比較研究の一報告」『河野六郎著作集1』537-556、平凡社、1944
福田昆之(編)『満州語文語辞典』、横浜：F F L、1987年
満文老档研究会(訳註)『満文老档』I-VII、東京：東洋文庫、1955年-1963年
中国語学研究会(編)『中国語学新辞典』、東京：光生館、1974年
津曲敏郎「清語老乞大の研究—満州語研究のための一資料(1)(2)」『論集』第21号、第22号、札幌：札幌商科大学、1977年—1978年
莊吉發『清語老乞大』、台北：文史哲出版社、1976年
愛新覺羅・烏拉照春『満洲語語音研究』、京都：玄文社、1992年
Möllendorff, P. G. Von *A Manchu Grammar with Analized Texts*, Shanghai: The American Presbyterian Mission Press, 1892.

